

吉田雪乃



18歳の未来予想図

スピードスケート高校三冠の偉業を達成した吉田雪乃選手は、恩師・植津悦典氏(盛岡工高スケート部監督)のもとで、2026年ミラノ/コルティナ・ダンペッツォ五輪を目指す。

取材・文 ● 盛岡広域スポーツコミッション

profile

吉田雪乃(よしだ・ゆきの)
2003年1月29日生まれ。盛岡市出身
盛岡市立北陵中学校、岩手県立盛岡工業高等学校卒業
(株)寿広所属

■主な成績
[2020年(高校2年)]
第3回ユースオリンピック冬季競技大会(ローザンヌ)
・女子500M 銅メダル
・NOC混合チームスプリント 金メダル
[2021年(高校3年)]
全日本ジュニアスピードスケート選手権大会女子500M優勝
全国高等学校スケート競技選手権大会(インターハイ)女子500M優勝
国民体育大会冬季大会スケート競技会少年女子500M優勝



植津先生のアドバイスに一言も聞き逃さない耳を傾ける吉田選手。

頂点を目指すにはあらゆる面でレベルアップが必要なのは本人がよくわかっている。基礎体力の向上はもとより、スタートダッシュのキレ、一步の距離を伸ばすスケイティング技術など克服すべき課題は多いが、今のところトレーニングは順調だ。

「月水金の午前はアイスリンクでの氷上練習で、そのほかは盛岡工高スケート部の練習や専門のトレーナーのもとでコンディショニングを行っています。高校時代に比べると内容はかなりハードですが、学校の授業がない分競技に専念できるし、体力的にリカバリーする時間的な余裕もあります」。

チームの一員だった学生時代と違い、今

は自立した一人のアスリートとして指導者とのコミュニケーションを図り、その意図を理解、納得した上でメニューに取り組んでいる。これは社会人であることを強く意識する吉田選手が大切に行っているプロセスだ。

「これまでは、自分のことだけを考えると好きなスケートを続けてきました。でも今は支えてくれる会社、私の意思を尊重してくれた両親、そして私のわがままを受け入れてくださった植津先生に対して責任があると思うんです。それをきちんと自覚して行動できる大人になりたいと思っています」。

オリンピックを目指す吉田選手にとつ

吉田雪乃選手と植津悦典先生の関係を見ていると、「啖啄同時」という言葉が思い浮かぶ。殻を破ろうとする雛と殻の外からそれを助ける親鳥に例え、学ぶ者と指導者の呼吸がぴたりと合うことを意味する禪語だ。

中学時代の吉田選手は、全国大会に出場したものの目立った成績は残していない。当然、盛岡工高への進学も勧誘があつて決めたわけではない。しかし高校生となつて植津先生から直接指導を受けたとたんその才能を開花させ、一気にジュニア世代の第一人者に上り詰める。高校卒業後は自らの意思で実業団の有力チームや強豪大学の誘いを断り、盛岡を拠点にして競技を続けることを決めた。理由は「植津先生のもとで練習を続けることがオリンピックへの一番の近道だから」。熱意に押された植津先生は、自分が育てた金の卵を世界の舞台に送り出すという大役を引き受けることになる。

4月から9月までは植津先生の指導のもとでトレーニングを積み、10月からは盛岡を離れて国内外の大会を転戦する。世界の

で、TOKYO2020で戦う日本代表の姿は大きな刺激になった。なかでも強く印象に残ったのが「バドミントンの奥原希望選手や柔道の阿部一二三選手の礼儀正しさ」だったという。勝ち負け以上に彼女が大切にしている価値観が伝わってくる。

あと2か月足らずで、社会人として初めてのシーズンを迎える。

「まずは世界ジュニア選手権500メートル優勝が今シーズンの目標です。目指すオリンピックは5年後。焦らずじっくりと力をつけていきます」

18歳のスプリンターが描く5年後の未来予想図には、ミラノ/コルティナ・ダンペッツォ五輪の大舞台に立つ自分の姿がはつきりと映っている。



みちのくコカコーポリングリンクで、盛岡工高の後輩たちとともに週3回の氷上トレーニングに励む雪乃。

Eight Olympians Project Vol.25
[エイト・オリンピックス・プロジェクト]

TOKYO2020へ、そして**その先に**

Presented by 盛岡広域スポーツコミッション

盛岡市 八幡平市 滝沢市 早石町 葛巻町 岩手町 紫波町 矢巾町

盛岡広域スポーツコミッションの情報はこちらから